

本書は従来の教科書の“常識の壁”をつき抜けた、まことにユニークな本である。わずか213ページの中に、口腔から肛門までの腫瘍性疾患と炎症性疾患の病理を網羅し、さらにその理解に必要な発生と正常組織に言及し、染色法と遺伝子診断に関係する技術のエッセンスまでが記述されている。これほどユニークで読者の立場に立った教科書は類をみないと言ってよい。病理学者の教科書は、概して記述が長く、しばしば自己主張が多いのが一般的であるが、本書はそれとは全く逆に、記述は短く簡潔で研究的データ、自己主張は一切なく、公認されている分類と必要最小限の写真が提示されているのみである。読者はまず本書の記述の思い切りのよさに感嘆するであろう。やろうと思えば、物事はここまで無駄をなくすることが可能なのである。しかし、症例を中心にまとめた著者が述べているように、教科書としての十分な情報も満載されている。単著であるがゆえの、あれも書きたいこれも書きたいという誘惑をバッサリと断ち切って、ここまで簡略にまとめた著者の勇気と英断には、お見事と感服せざるをえない。

著者の藤盛博士は今では高名な消化管病理の大家であるが、筆者は氏が現在のように主役を演じる以前から注目し、期待を込めて見守っていた。従来の病理医とはちょっと肌合いの違う言動に、戸惑いを感じる臨床家も少なくなかったと想像するが、分子生物学的手法を古典的病理学に積極的に取り入れる、という新しい方向をめざす姿勢には常に声援を送ってきた。氏の教室には学内外から常に多数の留学生が集まっていると聞くが、本書の出版に際して彼らの協力が大きかったことは同慶の至りである。比較的短期間にかかる大著(ページ数は少なくとも内容は大著に匹敵する)が著せたのも、多方面からの資料提供を可能にした氏の日頃の情熱とリーダーシップのなせる業であると敬服している。

さて、本書のユニークな内容について簡潔に紹介する必要があるだろう。全体で8章のうち、第1章で生検、切除材料の取り扱い、生検に関する実際の諸注意が述べられている。さらに、大腸sm癌の取

り扱いが説明され、大腸sm癌の種々相としてsm癌のさまざまな典型例が提示されている。この「○○癌の種々相」は各臓器別に症例報告のごとく提示されているのが独創的で、初心者はここを通覧すれば消化管病理の門をくぐったことになる。

あとは、口、食道、胃、小腸、大腸の順に各臓器別の種々の疾患に関して、2~3行から数行の無駄のない説明と内視鏡像、病理組織写真が並び、通覧すれば消化管病理の概要は理解できるようになっている。記述が短く簡潔なので、読むのにも時間はかからない。最近の多忙な医師の生活にマッチした、近代的教科書と言うべきであろう。

第7章が本書のユニークさの一端を示している。ここでは、通常は最初に来るであろう消化管の発生、器官形成が語られ、正常組織像のアトラスが提示されている。第8章の消化管病理に必要な基礎的染色法と遺伝子診断に関連する技術の項は、著者の面目躍如たる部分であり、本書の最大の特徴の一つをなすと言ってもよいであろう。染色法、遺伝子診断法ともに試薬の作り方から検出法までが提示されている。必要とあれば、読者はその記述に従って染色、遺伝子診断を行うことができる。何と行き届いた教科書であろうか。古典的病理学に満足しない著者の、より多くの若い病理医ならびに臨床医に、著者のめざす方向への理解を深めたいという願いが伝わってくる。

文献は565編が巻末に収録されているが、それ以外にどの教科書にも引用されているような代表的なものは、本文中の()の中に配置されているのも無駄がなくてよい。教科書は大成し高齢に達した大家が著すものという常識は、もはや過去のものであることを、本書を通覧してしみじみと感じた。しかし、一方で、著者が成熟の域に達したときに著す成書はどんなものであるかが楽しみでもある。本書は病理医のみならず消化管専門医にとっても有用であり、あまねく消化管の臨床家に推薦したい。

(B5判 264頁 定価12,600円(本体12,000円+税5%))
(2004年 医学書院 刊)